

# 日本銀行旧小樽支店

中村茂樹 日本銀行文書局技師

日本銀行の本店本館が日本経済の番人としての「産業遺産」とすれば、地方都市に設けられた支店建物もまた地方経済の番人としての「産業遺産」と言えるかもしれません。日本銀行の支店建物は、本店建物にも増して地元市民の方々から親しまれてきました。第一回は、今年の七月に築一〇〇年を迎えた旧小樽支店建物（金融資料館）を紹介します。

## 小樽派出所から出張所を経て小樽支店へ

明治二年（一八六九）、明治新政府は開拓使（注1）を設置し、それまで幕藩体制外の「蝦夷」と呼ばれた地を「北海道」と改め、「オタルナイ」と呼ばれた人口二二〇〇人の小さな漁村を「小樽」と改めました。

アイヌとの交易とニシン漁を営む和人集落が北海道開発の中で北日本を代表する商業都市へ発展する始まりです。以前からの天然の良港に開拓使の置か

れた札幌の外港としての地の利も加わり、小樽は急速に発展していきました。

明治十三年（一八八〇）には札幌―手宮（小樽）間に鉄道が開通しました。同鉄道は、旅客用としては北海道はもとより日本でも三番目に早い開通です。二年後には幌内（現在の三笠市）まで延長され、幌内の炭鉱から手宮までの石炭輸送が開始され、小樽港の重要性がますます高まりました。

それまで、北海道においては、北海道開発に伴う国庫金の取り扱いなどを、先に進出した民間の銀行に委託してい

ました。

開発の拡大に伴い、北海道の金融をより円滑にするため、同業務を日本銀行の直扱いにして、明治二十六年（一八九三）四月、道内の札幌、函館、根室の三カ所に出張所を設置し、小樽ほか一五カ所の派出所を設けました。

小樽の貿易港、商業都市としての発展と共に小樽派出所の業務はますます拡大し、明治三十年（一八九七）十一月、出張所に昇格しました。

さらに、日露戦争により領有権を得た南樺太開発の中継点としての重要性



上／現在の外観  
左／新築時の外観  
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

（注1）開拓使  
北海道開拓のための地方行政機関。明治二年（一八六九）～明治十五年（一八八二）。廃止後は札幌県、函館県、根室県が設立された。



写真3 (上) 長野宇平治 明治26年(1893)帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。日本銀行技師長。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店を始めとする数多くの銀行建築を手掛けた。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

写真2 (下) 辰野金吾 明治12年(1879)工部大学校(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を第一回生として卒業。近代日本建築界の先覚者。日本銀行建築顧問。日本銀行本店本館のほか、東京駅など明治大正期の日本を代表する建築物を数多く手掛けた。

(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真1 小樽出張所(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



も加わり、明治三十九年(一九〇六)八月、支店に昇格しました。

一方、小樽の支店昇格と同時に、先に昇格した北海道支店(函館)が函館出張所に戻り、札幌出張所が廃止されるなど、北海道の行政と商業の中心地の推移を反映して支店体制も複雑に変化していきました。

小樽と札幌の人口を大正九年(一九二〇)の国勢調査で比較すると、小樽の一〇万八一一三人に対し、札幌が一〇万二五八〇人と、大正期の半ばまでは小樽が札幌より大きな都市であったことが分かります。

### 小樽支店の建築

小樽派出所は、先に小樽に進出した色内町所在の三井銀行小樽支店の建物内からスタートし、堺町所在の建物を経て、さらに、出張所への昇格に対応するため、明治二十九年(一九〇六)に現在地に近い色内町の官有地の払い下げを受け、木造二階建ての建物に移転しました(写真1)。

明治三十九年の支店昇格と将来的な業務の拡大に対応するため、営業所建物の新築計画が決定され、明治四十年(一九〇七)に色内町の元小樽治安裁判所の跡地を新築用地として取得しました。

小樽支店新築の設計は、辰野金吾(写真2)と長野宇平治(写真3)に委ねられ、さらに岡田信一郎(注2)も加わっています。

長野は日本銀行の技師長として基本設計から竣工検査までの実質的な設計監督を務め、東京から小樽の工事現場に年三、四回の出張を繰り返しました。

一方、岡田は東京帝国大学(現在の東京大学)を明治三十九年(一九〇六)に恩賜の銀時計(注3)を授かって卒業したばかりの少壮建築家で、辰野金吾からその資質を買われて日銀の嘱託に推され、長野の下で図面作成を担当しました。

長野は小樽支店の設計と並行して北海道銀行(注4)の本店の設計のほか、台湾総督府庁舎(注5)の設計競技に応募して、岡田もその図面作成を手伝ったと言われています。引き続き大阪市中央公会堂(注6)の設計競技には二人が共に応募し、岡田が一等で、長野が二等となる快挙を得ました。ある面では、当時の建築界に台頭する二人が小樽支店にかかわったとも言えます。

日本銀行顧問の辰野はそういう二人の後輩の設計チームを的確かつ厳しく統率する立場でもありました。

工事は、明治四十二年(一九〇九)

(注2) 岡田信一郎

東京帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部) 明治三十九年(一九〇六)卒業。大正・昭和初期に活躍した建築家。東京美術学校(現在の東京藝術大学)教授。歌舞伎座、明治生命館等を設計。

(注3) 恩賜の銀時計  
戦前、軍学校、東京帝国大学等の卒業式で、成績優秀者に天皇からの下賜品である銀時計が授与された。

(注4) 北海道銀行  
小樽銀行を前身として、明治三十九年(一九〇六)北海道商業銀行を併合して生まれた小樽最大の地場銀行。現存する北海道銀行とは別。旧北海道銀行の建物は、現在は小樽市指定歴史的建造物の一つに指定され、商業施設(小樽ハイン)として使用されている。

(注5) 台湾総督府庁舎  
台湾を統治するために設置された日本の出先官庁。本庁舎(大正八年(一九一九)竣工)は台湾の総統府として現存。

(注6) 大阪市中央公会堂  
通称中之島公会堂。大正七年(一九一八)竣工。設計競技一等の岡田案を設計原案とする、国の重要文化財。



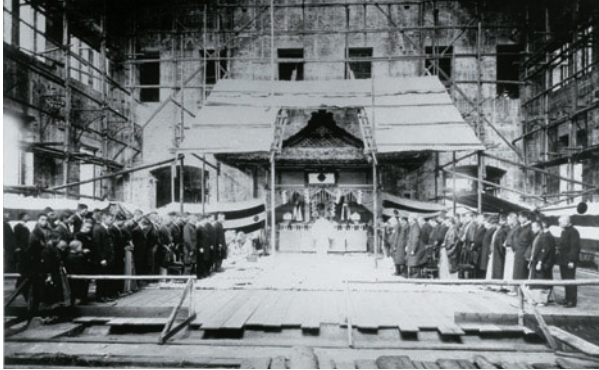


写真5 上棟式



写真6 屋根裏に残る幣束

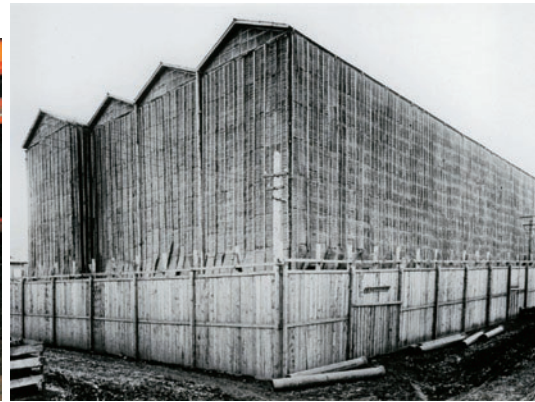


写真4 素屋根で覆われた新築工事

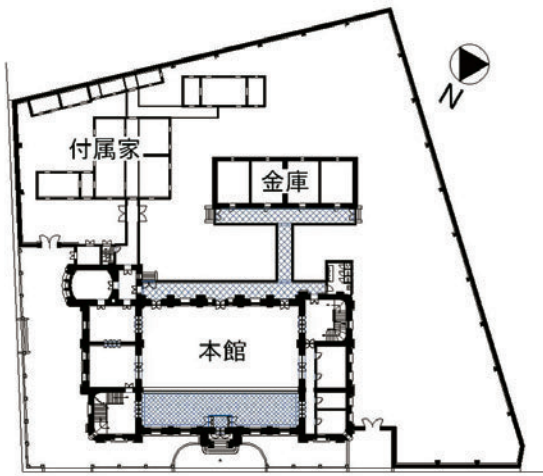


図 新築時配置図

七月に着工し、三回の越冬を経て明治四十五年（一九一三）七月に竣工しました。

写真4は建築中の建物全体を素屋根で覆った工事現場です。十一月から三月までの冬期五カ月を休止する過酷な施工条件の中で、厳しい品質管理を強いる工事が行われました。

写真5は明治四十三年（一九一〇）十一月に行われた上棟式の様子です。今でも屋根裏に当時の祭事で飾られた幣束（写真6）がそのまま残っています。竣工日は明治天皇崩御の五日前の二十五日で、竣工式典は自粛されました。まさに明治期最後に完成した建物でした。

### 時代を先駆した小樽支店建物

新築時の小樽支店は、本館、金庫および職員食堂などがあった付属家（写真7）で構成され、各建物は渡り廊下で接続されています（図）。

本館は、構造をレンガ造り二階建てとする、北側正面に四つの小ドームと窓を左右対称に配置した古典様式の建物で、側面の東南隅に設けた小樽港を眺望する四階建ての望楼（写真7）が大きな特徴となっています。また外壁を飾

る一八体のレリーフも特徴の一つで、アイヌの守り神であるシマフクロウを模したものとも言われています（写真8）。

外壁は、大阪と北海道（野幌）産のレンガをイギリス積み（注7）し、外側に深い目地を施してモルタルを塗り、腰壁部分と窓出入り口周りには本店本館と同じ岡山県北木島産の花こう石を積んで、全体を重厚な石造り風に見せています。

屋根は、鉄骨トラス構造の小屋根組みで支えられ（写真9）、同小屋根組みの上に防火用のコンクリートを打ち、その上に亜鉛メッキ波形鉄板を葺いています。木造の小屋根組みが一般的である中で、鉄骨トラスは日本銀行の支店建物（大阪の一部を除く）では初めての採用で、使用されている鉄骨

は官営八幡製鐵所（注8）の初期製品です。

鉄骨トラスの採用により、屋根を支える壁や柱の数を少なくすることで柱のない吹き抜けの営業場が可能となりました（写真10）。吹き抜け上部の壁には外壁と同様の一二体のレリー



写真7 かつては望楼の窓から小樽港を出入りする船舶が確認できた。

（注7）イギリス積み  
レンガの積み方の一種で、長手積みと小口積みを一段おきに交互に積み、強度が最も強い積み方で、明治二十年代以降のほとんどのレンガ積み建物で使われている。

（注8）八幡製鐵所  
明治三十四年（一九〇三）に官営製鐵所として操業開始。戦前には日本の鉄鋼生産量の過半を製造する国内唯一の製鐵所。現在は八幡製鐵所の後身である新日本製鐵の事業所となっている。





写真9 屋根裏の鉄骨トラス



写真10 新築時の営業場風景



写真11 建物内外壁の塑像  
~フクロウ~ (内壁)



写真8 建物内外壁の塑像  
~フクロウ~ (外壁)

フが営業場を睥視するように飾られています(写真11)。

屋根下地のコンクリートと同様に、一階と二階の床もコンクリートによる防火床となっています。木造床が一般的である中で、多発していた小樽市内の大火に備えた対応で、外壁に面するすべての窓にも防火シャッターが設置されています。

時代を先駆した小樽支店建物は、本店本館と大阪支店に次ぐ工費(約三七万円)を費やし、先に完成した同規模の京都・名古屋支店に比べると約二倍を費やす大工事でした。

## 金融資料館としての再生

大正期の小樽に設置されていた銀行は一九行に及び、とりわけ小樽支店の面する大通りは銀行が集中し、地元市民から「北のウォール街」と呼ばれていたほどでした。

今小樽の街を歩くと、驚くほど多くの明治大正期の建物に出会えます。小樽市はこの街並みを保存するために、小樽支店建物を小樽市指定有形文化財に指定し、現在六八件の建造物を有形文化財に準ずる歴史的建造物に指定しています。

日本銀行小樽支店はその業務を札幌支店に継承し、平成十四年(二〇〇二)

九月に廃止されました。小樽の繁栄と北海道の経済発展を共に生きてきた旧小樽支店は、その記憶を継承する建物の有効活用策として、日本銀行の広報活動を目的とする金融資料館として平成十五年(二〇〇三)五月に再スタートしました(写真12)。

金融資料館では、建物内を支店当時のままの姿で一般公開し、日本銀行の歴史や役割等について、展示紹介しています。

資料館として開館以来、年間一〇万人規模の来館者が訪れ、平成二十四年(二〇一二)八月には延べ九〇万人を超えるなど、旧小樽支店は小樽の観光スポットの一つとなっています。

今年で築一〇〇年目を迎えた旧小樽支店建物がこれからも小樽市民に親しまれていくことを期待します。



写真12 金融資料館 歴史展示室

### ■金融資料館

【入館料】 無料

【所在地】 北海道小樽市色内 1-11-16

【お問い合わせ先】 0134-21-1111

\*改修工事のため2012年10月までは部分開館、同11月には全面閉館。

\*最新の開館情報は金融資料館HPをご覧ください。

<http://www3.boj.or.jp/otaru-m/>